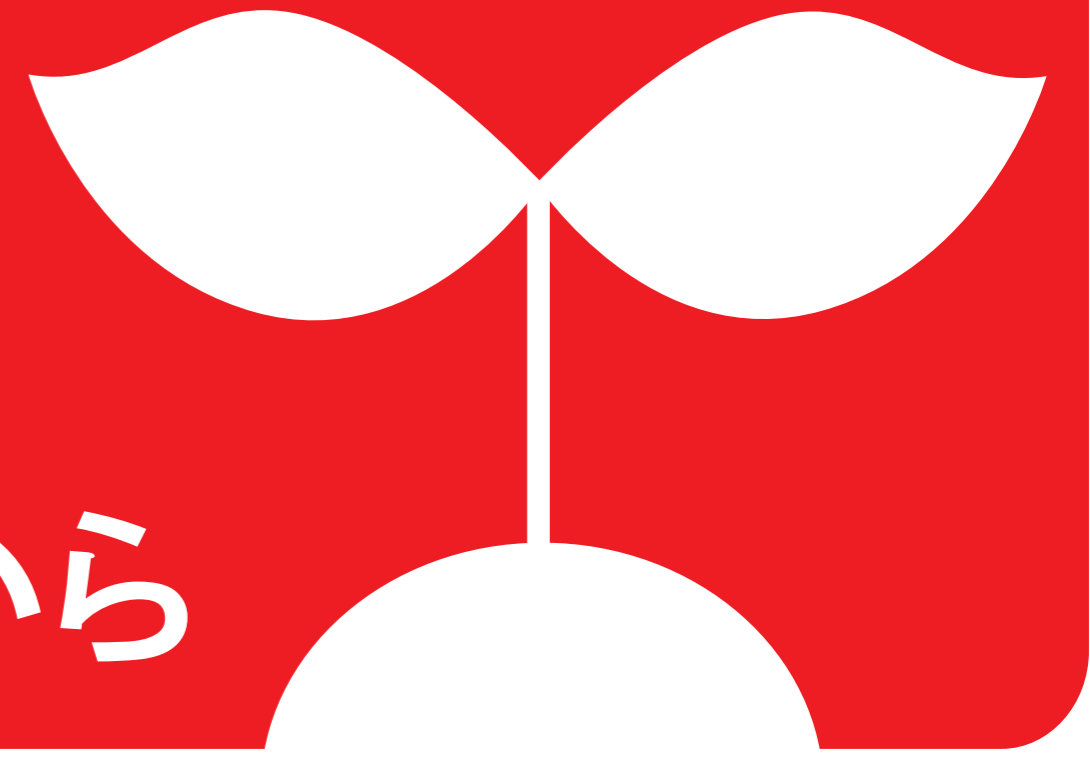


# >> 「通じない」という言語の壁を飛び越えたい 食を感じることは文化を知ること 脈々と継がれる伝統を古都の食事から



## 先斗町 翻訳PJ

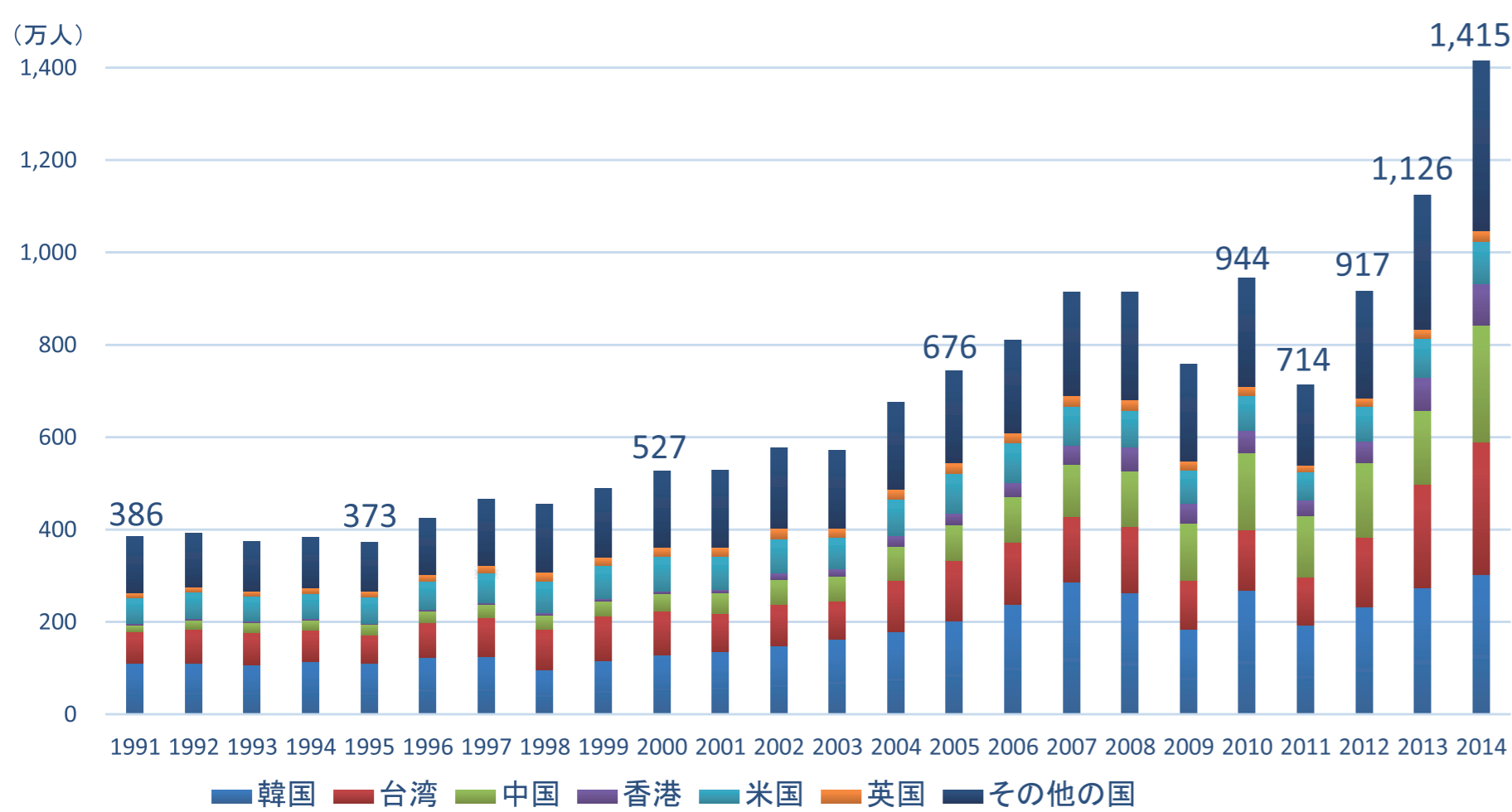
先斗町の多言語化をお手伝い  
先斗町翻訳プロジェクト事業

## 先斗町翻訳プロジェクト事業

京都市中京区に位置し鴨川と木屋町通の間にある花街、先斗町。長い歴史を持つその街は、夏には川床、秋には水明会と古都京都らしい姿を見せてくれる。そうした街を景観・食文化・伝統の三面から外国の人にも楽しんでもらいたい。その想いで飲食店の多言語化をお手伝いしています。

## 増加する訪日外国人

米国旅行雑誌「Travel + Leisure」が実施した2015年世界人気都市ランキングで京都市が2年連続1位を獲得したことは記憶に新しい。政府主導によるビザ発給要件緩和などのインバウンド戦略が進められてきている昨今、今後も京都をはじめ訪日外国人観光客数の更なる増加が予想される。



※図1 訪日外国人国別人数推移 (万人)  
法務省出入国管理統計表を基に独自作成

## 遅れる多言語対応

日本の受入体制を他の先進諸国と比較すると、特に言語対応の点で大きな後れを取っている。標識一つを挙げても、ローマ字表記を以て「言語対応」としている節がある。飲食店でも多言語化が遅れており、早急な言語対応が求められる。そうした背景から我々は京都の「食」の多言語化に注目した。外国人観光客が古き良き古都の街で食を楽しむことは、文化を楽しむことでもあるからだ。日本の伝統や文化といった「和」の本質を味わいに来ている彼らが、日本では英語すらも通じなかったとの感想を抱いて欲しくない。京都を代表する花街の一つである先斗町には多くの料亭・割烹が軒を連ねていることから、日本の「通じない」という言語の壁を「学生の街京都」から飛び越えるべく活動を展開している。

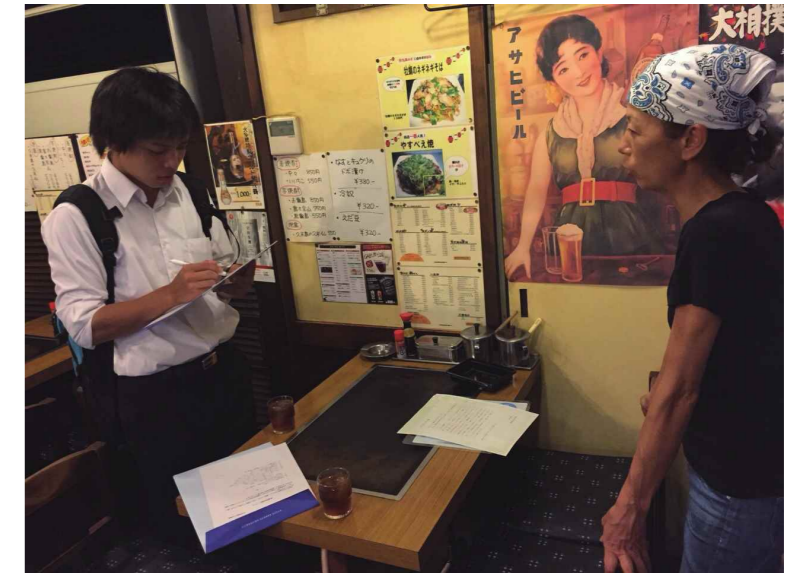


※図2 ローマ字で直訳した標識

## ニュアンスを伝えることの難しさ

店舗を訪れた外国人観光客が快適に過ごせる体制を築くことが「本質的な多言語化」であるとの想いから2015年度は13店舗の多言語化を引き受けた。

各店舗の抱える課題や苦慮されている点などを一店舗ずつ訪問し、要件を定義を通じて協力店舗の実情に合わせた多言語化を実行したのが特徴的である。料理メニューの表現をはじめ、言い回しやデザインのイメージ感など多岐にわたるすり合わせをした。特に外国語では存在しない日本語独自の料理名には時間を要した。「八寸」のように外国語では存在しない料理は見た目や匂い、味などのニュアンスを文字に落として表現するため、協力店舗とのイメージにズレが生じないように翻訳に取り組む必要性があるためである。



※図3 協力店舗への訪問の様子

実店舗に赴き要件定義を行うと、メニュー以外にも外国人観光客対応に苦慮していることが見えてきた。例えば「銀聯カード使用不可」や「中国語メニュー設置店」などを視覚的に伝えられるものが欲しいとの要望である。翻訳業者のように、受けたメニューをそのまま翻訳していたら聞こえてこなかった声である。先斗町翻訳PJ事業ではそうした声を反映させ、本質的な多言語化を実現することを理念に掲げていることから、店舗の玄関に貼付けるシールを提案した。多くの店舗で採用され、店舗運営に大きく寄与することができた。

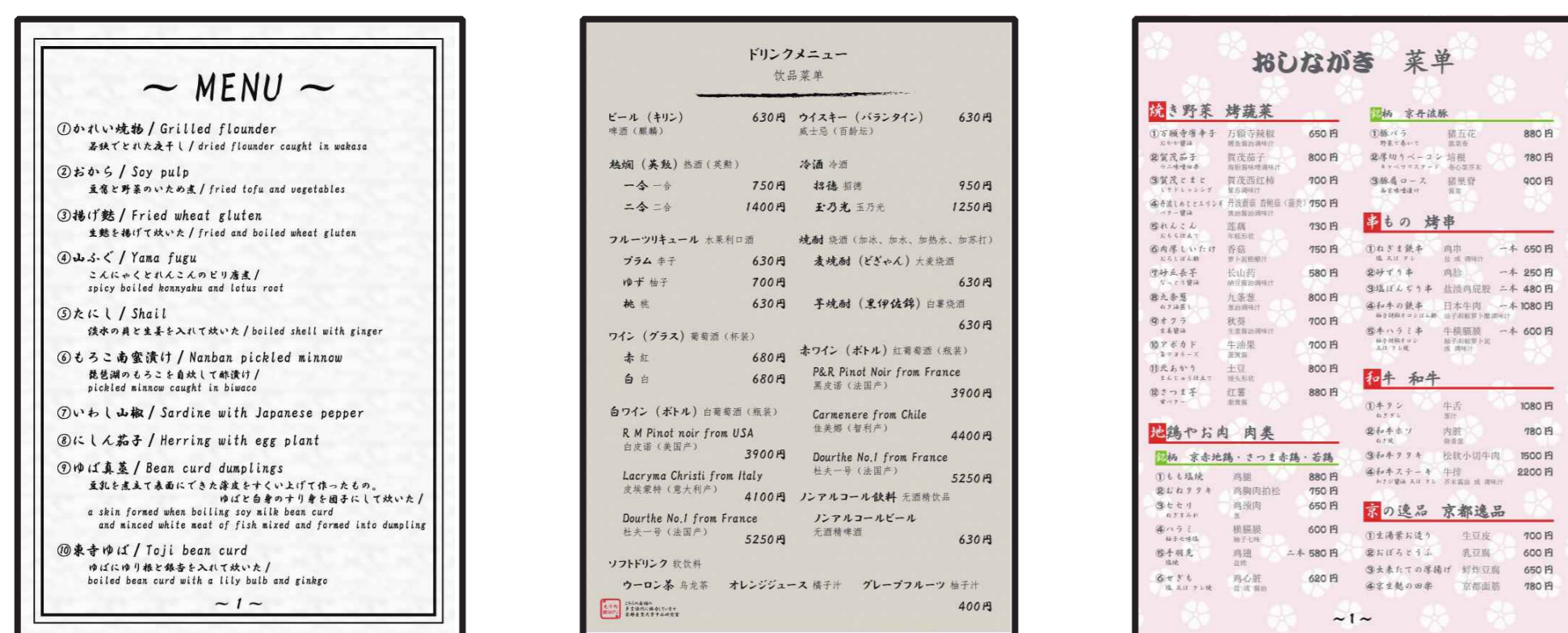
## お店と外国人観光客を繋いでくれた

古き良き古都の食を楽しむことは文化を楽しむことであり、お店はその架け橋的な要素を秘めている。お店と外国人観光客、文化を結び合わせる役割を果たしたいとの想いで多言語化に取り組んできた。協力店舗からは多くの好評をいただいた。また、受け渡し時に「外国人観光客の増加スピードに、受け入れ態勢の不備に危機感を覚えている」などの声をいただいたこともあり、こうした声に応えることができるよう今後も活動を展開していく次第である。



シール型式にしてくれたのは助かりました。  
お店と外国人観光客を繋いでくれた。  
(50代店長・女性)

## 翻訳メニューデザインの一例



## 啓発シールの一例

